

テモテへの手紙第一3章 「キリストに倣う指導者」

1A 監督の職 1-7

1B 品位 1-3

2B 非難なき姿 4-7

2A 執事の職 8-13

3A 偉大な敬虔の奥義 14-16

本文

テモテへの第一の手紙 3 章を開いてください。私たちは、エペソの諸教会を監督するテモテに対して、パウロが、ゆだねられた真実なことばをしっかりと保つように命じている手紙を読んでいます。改めて背景を話すと、エペソの中に違った教えを持ち込む者たちがいました。しかし、パウロがテモテに強調しているのは、私たちが任されているものは、そうした論議を引き起こすものではなく、「きよい心と健全な良心と偽りのない信仰から生まれる愛(1:5)」だということです。

前回、2 章において、パウロはそのことを念頭に置きながら、王たちや高い地位にいる人々のことを祈りなさいと命じました。理由は、彼らの統治いかんによって、「2:2 私たちがいつも敬虔で品位を保ち、平安で落ち着いた生活を送るためです。」とあります。そして、教会の公の礼拝で、男たちは祈りなさいと言っていますが、それは、「怒ったり争ったりせず、きよい手を上げて」祈りなさいと言っています(2:8 参照)。そして女たちは、支配して教えたりすることなく、静かに学び、よく従いなさいと言っています。すべては、この敬虔のためであります。

そして3章において、パウロはテモテに、監督や執事を各教会に立てて行く時の基準を教えています。当時の教会は、家の教会であるとか、少人数の集まりが数多くあったと思われます。それで、テモテは、それらの集まりの全体の監督をしていると思われます。ですから、各所に監督を立て、また執事を立てなければいけません。その時に何を気を付けなければいけないでしょうか？そうです、敬虔さです。

私たちはとかく、その働きをできるかできないか？という、業務をこなす能力を見てしまいがちです。けれども、例えば口の立つ説教者で姦淫の罪を犯しているのと、朴訥な語り口だけでも、一人の妻を愛してやまない人と、みなさんはどちらを選びますか？キリスト教の世界を見ますと、姦淫の罪を犯していることが発覚しているのにも関わらず、それでも、その説教のすばらしさでついていく人々が多くなります。しかし、聖書は一貫して、立てられている人々の資格として、内なる品性や身近なことで忠実であるかについてのことが、列挙されています。モーセの舅イテロが、モーセの他に、民をさばくための人々を立てなければいけないと助言しましたが、「あなたはまた、民全体の中から、神を恐れる、力のある人たち、不正の利を憎む誠実な人たちを見つけ」なさいと言っ

ています(出エ 18:21)。力のある、と言っていますから、能力も必要なのですが、神を恐れること、そして不正の利を憎んでいることが求められています。

1A 監督の職 1-7

1B 品位 1-3

¹ 次のことばは真実です。「もしだれかが監督の職に就きたいと思うなら、それは立派な働きを求めることである。」

「監督の職」について、ギリシア語では「よく見張る」という意味です。日本語の言葉は、その意味を適切に表していると思います。教会の全体をよく見ている、また一人一人の魂をよく見ている、ということです。ヘブル書の著者が、こう勧めています。「ヘブル 13:17 あなたがたの指導者たちの言うことを聞き、また服従しなさい。この人たちは神に申し開きをする者として、あなたがたのたましいのために見張りをしているのです。ですから、この人たちが喜んでそのことをし、嘆きながらすることにならないようにしなさい。そうでないと、あなたがたの益にはならないからです。」教会全体のことも見っていますが、霊的に指導する立場の人です。

そして、「長老」と呼ばれる人々も出てきます。監督が、ギリシア社会の中でよく使われていましたが、こちらは旧約時代から使われており、ユダヤ人にはよく知られた言葉です。「イスラエルの長老たち」という言葉が数多く出てきます。その呼び名のとおり年を経た人々、成熟した人を意味します。共同体の中で、人々を治める権威が与えられています。

そして、使徒の働きや手紙の中でも出てきます。アンティオキアの教会でモーセの割礼を受けなければ救われなかったユダヤ主義者がやってきたので、その決着のためにパウロやバルナバはエルサレムに戻りましたが、「使 15:2 それで、パウロやバルナバと彼らの間に激しい対立と論争が生じたので、パウロとバルナバ、そのほかの何人かが、この問題について使徒たちや長老たちと話し合うために、エルサレムに上ることになった。」とあります。したがって、そのエルサレムにおける教会会議において、異邦人が救われる方法について、それがただ信仰によって心が清められるのだ、律法を彼らに負わせてはいけないという議決が聖霊によって出ましたが、その中で長老たちが関わっていました。

そして、指導者として「牧者」という呼び名も出てきます。旧約聖書では、王たちに主に使われていました。少年の時羊飼いをしていたダビデが、王になってもその心を忘れずに治めていたことが詩篇に書かれています。「78:70-72 主はしもベダビデを選び羊の囲いから召し出された。乳を飲ませる雌羊の番から彼を連れて来て御民ヤコブをご自分のゆずりの民イスラエルを牧するようになされた。彼は全き心で彼らを牧し英知の手で彼らを導いた。」羊を養い、世話し、そして狼など外敵から守る、という働きが、牧者の意味に含まれています。

使徒の働きに、長老たちが集められた時に、パウロは彼らに、「監督」という言葉も、また「牧者」という言葉も使って話している箇所があります。パウロが、エルサレムへの旅を彼がミレトスに着いた時に、急いでいたので自分がエペソに行くのではなく、長老たちを呼んで、言葉を伝えました。「20:28 あなたがたは自分自身と群れの全体に気を配りなさい。神がご自分の血をもって買い取られた神の教会を牧させるために、聖霊はあなたがたを群れの監督にお立てになったのです。」長老たちに対して、牧しなさいと言って、また監督していると言っています。ですから、長老、牧者、監督はみな、同じ人々のことを指していました。ここ3章1節にあるように、どの地位についているかという視点ではなく、どの「働き」をしているか、その働きのことを説明しているに他なりません。

そして、「監督の職に就きたい」と言っています。ここの「就きたい」と願っているのは、どうすることのできない抗えない熱心さや願いを示しています。スポルジョンが言いました。「天よりの召しの最初のしるしは、そのわざに対する熱心な願い、そのためにはすべてを捨てて顧みないという欲求である。教役者への真の召命には、神が私たちの魂になされたことを他の人々に語りたいたいという、抗することのできない、圧倒的な願いと激しい渴きがなければならない。」¹他の不純な動機、例えば、日本では起りにくいですが、生活のための働き口として考える人もいます。また、表に立っている人なので、何かかっこいいと思ひ、目立ちたいと願う人たちもいます。そういった人には、魂に対する熱心な願いは見えません。

いろいろ困難なことがあっても、それでもやり抜く力は、主から召されたところにある、この強い願いです。牧者また長老の特徴として、ペテロは第一の手紙で、こう言っています。「5:2-3 あなたがたのうちにいる、神の羊の群れを牧しなさい。強制されてではなく、神に従って自発的に、また卑しい利得を求めてではなく、心を込めて世話をしなさい。割り当てられている人たちを支配するのではなく、むしろ群れの模範となりなさい。」心を込めて行うこと、模範になる、つまり率先して行うことがあります。主の召しに裏打ちされた強い願いがなければ、務めることはできません。

そして、「立派な働きを求めること」と言っていますね。反対に言うと、すばらしくない仕事なのだという雰囲気があったのではないかと思います。監督も、また次に出てくる執事も、地道で静かな働きです。エペソにおいては、それよりもっと目立つような働きがもてはやされていたのかもしれませんが。律法の知識をひけらかすような人たちがいました。あるいは奇蹟やしるしの賜物があつたのかもしれませんが。しかし、監督の働きは、すべて目立つようなことが起こった後で、落されたごみを拾うような地道な働きであります。しかし、それでも地道に働き、成し遂げる人を、主は立派であると評価しておられるし、また、私たち人間も、そうみなさないといけません。

² ですから監督は、非難されるところがなく、一人の妻の夫であり、自分を制し、慎み深く、礼儀正しく、よくもてなし、教える能力があり、³ 酒飲みでなく、乱暴でなく、柔和で、争わず、金銭に無欲で、

¹ <http://ameblo.jp/justincase/entry-11062990771.html>

監督に必要なのは、実は、執事にも必要ですが、「非難されるところがな」ということです。これは、罪を犯さない、完璧であるということの意味しません。そうではなく、人々から非難されても、実はその証拠がない、身が潔白というような意味合いです。5章19節には、「長老に対する訴えは、二人か三人の証人がいなければ、受理してはいけません。」とあります。訴えや非難されることはやむを得ないことです。私たちの主イエス様は、ご自身に向けられた数々の非難を持っておられました。けれども、証拠や証言がないのです。そのようではいけません、ということなのです。

次に「一人の妻の夫であり」とあります。これは監督が既婚者でなければならないという意味ではありません。このことを話しているパウロ自身、彼は独身でした。そうではなく、当時の社会では、二人以上の女がいることは当たり前だったので、そのように話しています。妻の他に関係を持っている女がいたのです。しかし、そうではなく、主が一人の男と一人の女を結ばせたとされるように、一人の妻なのだということなのです。

次に「自分を制し」とは、「極端に走らない」という意味合いです。感情面の安定を話しています。教会にはいろいろな不安定要因があります。分裂の危機があったり、経済的側面が窮してきたり、家庭にさまざまなしわよせが来たりと、心理的に圧迫があります。けれども、そのような時でも自暴自棄になつたりせず、主の平安をいただき、健全さを保っていることです。そして、「慎み深く」とは、知性における明晰さであります。教会で起こっている様々な事を総合的に考えて、長期的な視野に立ち、主から知恵をいただきつつ決断をしていかなければいけません。自分の気分や、そのときの思いで動かない、ということなのです。そして「礼儀正しく」とありますが、女性の身だしなみについてパウロが言及した、「控えめに」と同じ言葉が使われています(2:9)。品位があるという日本語でも表現できるでしょう。

そして感情や行動における安定感があると同時に、「よくもてなし」という親切な行為も資格の一つです。人々に接することを喜んで行っていくことが求められます。そして「教える能力があり」とあります。これは、必要不可欠な能力です。エペソ4章11節には、キリストが、「ある人たちを牧師また教師としてお立てになりました。」とあります。ここの「また」というのは、点にして読んでよい接続詞です。すなわち「牧師・教師」なのです。牧師であって、教えられないということはありません。教師であって牧師ではないということはあるけれども、その反対はありません。再びスポルジョンの言ったことを引用しましょう。「牧師になりたいという熱心な願いとともに、適切に教える能力、その他の公の教師としての任務に必要なある程度の特質を備えていなければならない。」

そして、「酒飲みでなく」とありますが、これは一切、酒を飲まないということではなく、まさしく「酒飲み」、習慣化している人のことです。聖書の時代、ぶどう酒は今よりもっとよく飲まれました。普通の水が、しっかりと浄化されておらず、腹を壊すことが多いからです。テモテに対して、お腹を壊していたので、パウロが少量のぶどう酒を飲みなさいと指示していますが、そのためです。箴言に

は、酒飲みの弊害が書かれています。「箴 23:29-31 嘆く者はだれか。悲嘆の中にある者はだれか。争いを好む者はだれか。不平を言う者はだれか。理由もなく傷ついている者はだれか。血走った目をしている者はだれか。ぶどう酒をいつまでも飲み続ける者、混ぜ合わせた酒の味見をしに行く者だ。ぶどう酒が赤いとき、杯の中で輝くとき、滑らかにこぼれるとき、それを見てはならない。」

次に「乱暴でなく」とありますが、その通りです。酒飲みの後で、ここの箴言の箇所にもありますが、「争いを好む」とありますね。酔いしれた人が乱暴を働くのはよくあることだからです。

そして、「柔和で、争わず」は、言い争いが絶えないエペソにある教会で、特に聞かなければいけない言葉だったでしょう。争うことから離れている人、平和を求める人でないといけません。そして、「金銭に無欲で」とあります。6 章で、金銭を愛する者たちへの警告の言葉があります。このことも、エペソの教会で起こっていたことだと思われまます。これらの特徴は、今、引用した箴言において、知恵ある者としての特徴と大きく重なりますね。ソロモンが知恵のある者として、繁栄したイスラエルを統治していましたが、人々が平安で落ち着いた生活をする(2:2)のには、指導者にとって必要な資質です。

2B 非難なき姿 4-7

⁴ 自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人でなければなりません。⁵ 自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会を世話することができるのでしょうか。

十分な威厳を持っているということは、力によってではなく、主から与えられた権威をしっかりと愛をもって示しているか？ということなのです。そのことによって、子どもを治めることができます。

ここで大事なことは家庭で治めることが、そのまま神の家族で治めることにつながっていることです。5 章 8 節に、「もしも親族、特に自分の家族の世話をしない人がいるなら、その人は信仰を否定しているのであって、不信者よりも劣っているのです。」とあります。そして、パウロがこの手紙で強調していることは、教会は神の家族だということです。教会が「神の家」であると 15 節で言っています。神は父なる神と呼ばれ、キリストは子なる方です。そして私たちは神から生まれた者たちであり、そして互いに対して兄弟であり、姉妹です。肉の家族に対して接するのと同じように、関係をもって教会のことを行っていくのだということです。

違った教えをして、論争を巻き起こそうとしている者たちの何が悪いのか？言っていることは正しいかもしれませんが。しかし、家族で何か対立が生じたり、意見の食い違いがある時に、それを表に出して、社会の不正義と同じように取り扱うでしょうか？ヨハネ第一は、同じ神から生まれた兄弟を愛する者はいのちを持ち、知識をふりかざして仲間から出て行き、憎んでいる者は死んでいると言っています。それだけ、愛し合っているというつながりが大事にされているのです。身近な関係が健全でないのに、どうして神の教会を治めることができるのか？ということなのです。

⁶ また、信者になったばかりの人であってはいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないようにするためです。

監督には、主から任されるものが非常に大きいです。それを、神の憐れみなしには、到底、務めることはできないことは、パウロがこの手紙の書き出しに、神の恵みとあわれみと平安があるように、と、憐れみを入れているところに表れています。神の憐れみを知っていること、自分が罪人のかしらなのに、憐れみを受けて、また恵みによって、主の働き人に召されていることを知っていなければ、すぐに高慢になります。刃物がどれだけ人を死傷させることができるのか知っているからこそ、医者や床屋の人たちに刃物を使うことを許されています。自動車がどれだけ人を殺す武器になってしまうかを知っているからこそ、自動車免許が与えられます。けれども、経験の少ない人は、車が動きスリリングを味わえることばかりが目に入り、それで交通事故を起こしてしまいます。信者になったばかりの人も同じで、主の恵みと憐れみについての知識がまだ足りないので、大きな権限が与えられると、悪魔のように高慢になってしまうのです。

⁷ また、教会の外の人々にも評判の良い人でなければなりません。嘲られて、悪魔の罠に陥らないようにするためです。

信者になったばかりの人が悪魔と同じ裁きを受ける、そしてここでも、悪魔の罠に陥るとありますが、教会は絶えず、神の民の集まりですから悪魔が何とかして引き落とそうと虎視眈々としていることが分かります。

そういった隙を見せないためにも、監督の人たちは、教会の中だけでなく、教会の外の人たちにも評判が良くないといけないということです。さもなければ、神の救いのために来られたキリストを証しするのに、その働きを妨げられてしまいます。教会というのは、この地から浮いたような存在ではなく、地にしっかりと足をおろした存在であります。落ち着きがあり、秩序があります。これは世と妥協するというのではなく、すべての権威が神から来ていることを認めることです。2章の冒頭で学んだことです。

2A 執事の職 8-13

⁸ 同じように執事たちも、品位があり、二枚舌を使わず、大酒飲みでなく、不正な利を求めず、⁹ きよい良心をもって、信仰の奥義を保っている人でなければなりません。

執事の職です。これは、使徒の働き 6 章から始まったことです。やもめに対する配給のことで、ギリシア語を話すユダヤ人が、ヘブル語の話すユダヤ人たちに対して、自分たちがないがしろにされていると訴えました。それで使徒たちが、給仕する者たち七人を選びました。その給仕する者たちが執事と呼ばれます。監督や長老が、霊的なことを含めて全体を見ているのに対して、執事は、物質的なことに関わります。教会の場所のメンテナンス、会計のこと、そういった類のものです。

このような人たちにも、監督と基本的に同じであることを、「同じように」と言って説明しています。「品位」が求められます。そして、「二枚舌を使わず」というのは、よく理解できますね。監督がいて、信者がいます。板挟みになることがよくあるからです。それで監督には、これこれのことを話して、信者には別のことを話すということをしてしまう誘惑があります。そうならない人です。そして、たとえ不都合なことを言わなければいけなくても、きちんと報告する人でなければいけません。「大酒飲み」ではないというのも、監督と同じですね。監督のほうが「酒飲みではなく」とありましたので、監督のほうが、基準が高いです。そして、「不正な利をむさぼらず」とありますが、執事は会計など、金銭がともなうことにも関わるので、気を付ける人でないといけません。

さらに、「きよい良心をもって、信仰の奥義を保っている人」とあります。執事という職は、ともすると、教会で必要なことがあるから、それを埋めるために、だれでも良いからやってもらうという傾向を持ちます。だれがやっても別に同じだからということで、その人の霊的素質をないがしろにしてしまいがちです。しかし、そうであってはいけません。使徒の働きで、執事に選ばれた七人ですが、「あなたがたの中から、御霊と知恵に満ちた、評判の良い人たちを七人選びなさい。」とあります。その中で、ステパノは、知恵と御霊によって語ったので、彼の語る神のみことばに、人々は対抗できませんでした。またピリポがいますが、サマリア人の間で信仰を持つ人たちが大勢現れましたが、伝道者として彼が用いられました。このような、雑事にさえ思われることに忠実であったので、主は霊的な事柄をもお任せになるのです。ですから、霊的に整えられた人こそが、執事をすべきです。

¹⁰ この人たちも、まず審査を受けさせなさい。そして、非難される点がなければ、執事として仕えさせなさい。

審査といっても、何か難しいテストを受けるわけではなく、以上の資格について備わっているかどうかを確かめる作業です。そこで非難される点がなければ、執事として仕えます。繰り返しますが、何か必要があれば行えるものではありません。教会の掃除であっても、そこには霊的な素質が求められます。ですから、その担当している人々に従うことが前提です。

¹¹ この奉仕に就く女の人も同じように、品位があり、人を中傷する者でなく、自分を制し、すべてに忠実な人でなければなりません。

ここは「執事の妻」と訳すこともできます。しかし、女の人も執事の務めを行っている人が聖書に登場します。ローマ 16 章 1 節に、パウロの手紙を受け取りローマに持っていく女執事フィベです。

その人もまた「品位」がなければいけません。その次に「中傷する者でなく」とあります。男に対しては、大酒を飲む、不正な利を求めないなどの資格がありましたが、女に対する資格と言ってもよいでしょう。テモテへの手紙には、若いやもめが言うてはいけないことを言う、という話もパウロはしています(5:13)。この分野においてしっかりと口を守る人が必要です。おしゃべりをして、変な

うわさ話を広めてはいけない、ということです。そして「自分を制する」ことは、監督の資格にもあったように、感情における安定です。何かが起こると、信仰によってではなく感情に走ってはいけません。そして、「すべてに忠実」でなければいけません。どんな小さなことにも、きちんと責任を果たしていかなければなりません。ある時にやって、またある時にはやらないという不安定な人はこの務めは担えません。

¹² 執事は一人の妻の夫であって、子どもと家庭をよく治める人でなければなりません。

男の執事に戻りますが、監督と同じ基準です。一人の妻の夫であり、子どもと家庭をよく治めています。

¹³ 執事として立派に仕えた人は、良い地歩を占め、また、キリスト・イエスを信じる信仰について、強い確信を持つことができるのです。

「良い地歩」というのは、人の前でこれは尊ばれるということです。執事とは、イエス様のように仕える人です。もっとも目につかない、地味な働きです。しかしパウロは励ましています、このような人こそが良い地歩を占めるのだと。それから、信仰について強い確信を持つことができます。この奉仕を通して、主にあって成長できるのです。奉仕を通して、主を知ることができます。

3A 偉大な敬虔の奥義 14-16

ここまで話してから、パウロは、教会というのはどういうところかを話していきます。

¹⁴ 私は、近いうちにあなたのところに行きたいと思いながら、これらのことを書いています。

パウロは、マケドニアに出発する時にテモテにエペソに留まるようにさせました。けれども、別れた時に教会においてどう行動、あるいは指導していけばよいかを十分に教えていませんでした。間もなくエペソに戻ることができると思ってはいたものの、遅くなった時のことを考えて、手紙によって早めに伝えておいたのです。

¹⁵ たとえ遅くなった場合でも、神の家でどのように行動すべきかを、あなたに知っておいてもらうためです。神の家とは、真理の柱と土台である、生ける神の教会のことです。

ここまでパウロが教えていた理由を書いています。「神の家でどのように行動すべきかを、あなたに知っておいてもらうためです。」ということです。教会が本質的に家なのです。パウロは 5 章で、いろいろな人々にどのように接するべきか教えています。「5:1-2 年配の男の人を叱ってはいけません。むしろ、父親に対するように勧めなさい。若い人には兄弟に対するように、年配の女の人には母親に対するように、若い女の人には姉妹に対するように、真に純粋な心で勧めなさい。

私たちはそこで食べ物を食べ、養われます。同じように教会というのは、神を父と仰いで、父から養いを受ける場所です。その食べ物はもちろん、御言葉です。御言葉による養いを、私たちは受けて、受けて、受け続けなければいけません。4章6節には、御言葉を教える牧会者自身が、その養いを受けていくことについて教えています。「これらのことを兄弟たちに教えるなら、あなたは、信仰のことばと、自分が従ってきた良い教えのことばで養われて、キリスト・イエスの立派な奉仕者になります。」そして、家族には、しつけが必要です。子が育つには、時に戒めも与えます。パウロは、信仰から彷徨ってしまったヒメナオとアレキサンデルについて、こう言いました。「1:20 その中には、ヒメナイとアレクサンドロがいます。私は、神を冒瀆してはならないことを学ばせるため、彼らをサタンに引き渡しました。」この厳しい処置は、その人が滅びるためではなく、むしろ悔い改めて、救われるためです。そして家族には、模範が必要です。子は親を見て育つと同じように、生活の中で信仰をどのように生かしていくのか、その模範を見せることによって育ちます。ですからパウロはテモテに、信者の模範になるように教えています。「4:12 あなたは、年が若いからといって、だれにも軽く見られないようにしなさい。むしろ、ことば、態度、愛、信仰、純潔において信者の模範となりなさい。」

そして、神の家とは、「生ける神の教会」と言っています。教会は、「エクレシア」というギリシア語で、「集会」という意味です。政治集会などの集会に、呼びかけを受けて集まる意味が元々のエクレシアです。召集をかけられる、つまり「召し出される」という意味合いのある言葉です。だから、自分の好みや考えがあっているということは、それは大きな要素ですが、しかし本質的には、個々の教会に自分が召されているか、主に呼ばれているか？にかかっています。

そして、「真理の柱と土台である」教会だということです。エペソには大きなアルテミスの神殿がありました。この神殿は現在では原形をとどめていませんが、当時は世界の七不思議に数えられていて、長さが115メートル、幅55メートル、高さは18メートルもあり、それが117本の柱で支えられており、総大理石で作られていたと言われています。パウロはおそらくこのことを考えて、「真理の柱また土台」と呼んでいるのだと思います。



「土台」については、パウロは他の手紙でも教会について数多く語っています。まず、イエスご自

身がペテロに教会について語られる時に、「わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます。(マタイ 16:18)」と言われました。ペテロが、「あなたは生ける神の御子、キリストです。」と告白した、その信仰告白の上に教会が建てられます。

パウロは、他の箇所でも教会が神の建物であることを教えていますが、ここテモテへの手紙の特徴は、「真理の柱」と呼んでいることです。教会はこの真理によって成り立っているのだ、ということが自分たちの内で分かるだけでなく、世に対しても、教会の外に対しても分かる形になっているのだということです。イエス様が言われました。「マタイ 5:14-16 あなたがたは世の光です。山の上にある町は隠れることができません。また、明かりをともして升の下に置いたりしません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいるすべての人を照らします。このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせなさい。人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようになるためです。」

¹⁶ だれもが認めるように、この敬虔の奥義は偉大です。「キリストは肉において現れ、霊において義とされ、御使いたちに見られ、諸国の民の間で宣べ伝えられ、世界中で信じられ、栄光のうちに上げられた。」

午前礼拝でじっくり学びました。神の家は、真理の土台と柱によって成り立っていて、その真理とはキリストのうちにあります。このキリストを知ることこそが、敬虔の偉大な奥義です。この方のなされたことをほめたたえ、この方を礼拝している中で、聖霊の働きで私たちが神に似た者になるということです。神が受肉されたということ。そこに人の体感があります。私たちが肉体をもって集まっているところに、キリストを知ることができます。そして御霊によって、この方のしていることが正しいと確かめられています。復活こそが、この方が御子であることが御霊によって明らかになりました。ですから、キリストが生きておられることを私たちは御霊によって知るので、そして、御使いが、いつも私たちのことを見えています。そして、諸国の間で宣べ伝えられていますが、私たちは神の救いから漏れることなく、どんなに反動的に生きて来たとしても、主は私たちに、キリストに似た性質を下さっているのです。そして、栄光のうちにあげられましたが、それは主が私たちをも栄光の姿に変えてくださるのです。こうした奥義が私たちに与えられているのです。だから、教会を見たら、生きておられる神を見ることができます。すごいところです。